Museum News

秋田県立博物館ニュース

目　　次

表紙・目次 …… P.1
企画展紹介
（報　告）企画展「わくわく科学展」…… P.2
（報　告）企画展「秋田のくすり今昔物語」… P.3
企画コーナー展紹介 …… P.4
（報　告）「真澄と俳諧」（菅江真澄資料センター）
（報　告）「随筆《久保田の落ち穂》の世界」（同上）
学芸ノート
（生　物）クマムシを観察しよう …… P.5
（民　俗）カッパの薬の流通範囲 …… P.6
博物館歳時記、表紙写真説明 …… P.7
平成26年度展示予定 …… P.8

表紙写真「博物館の職人芸」

No.158

展示報告

平成25年11月10日（日）～平成26年１月13日（月・祝）

企画展 わくわく科学展

多くの方々に科学のおもしろさを感じていただくため、磁石や電気など主に小中学校の理科（物理関係）の内容から35種類の実験のほか宇宙に関するトピックスや理科実験の道具類を紹介しました。小中学生だけでなく幼児から年配の方々まで楽しんでもらえました。実験中心の展示のため、解説員以外に展示担当職員や展示サポーターが２名常駐し実験方法等を説明しました。観覧されたりホームページで情報を得られた小学校の先生方から出前展示を依頼され、企画展終了後３校で実施しました。

各コーナーを代表する実験や資料を紹介します。

（学習振興班：大森　浩）

① 物の重さ
・てこの原理実験　竿ばかり

② 物の運動
・テーブルクロス引き　金属球コースター

③ 磁石
・空中で回るコマ

④ 電気
・自転車で発電　静電気であそぼう

⑤ 空気・大気圧
・空気の重さ　ヘロンの噴水

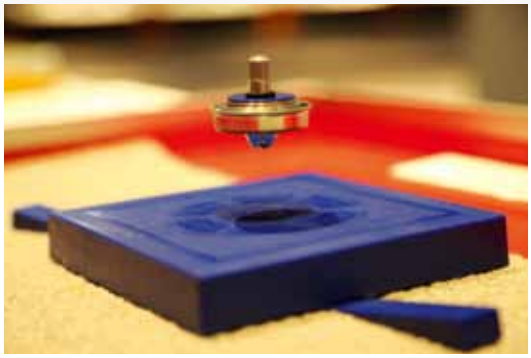
⑥ 光
・光の３原色と影　光の反射・屈折

⑦ 再結晶
・食塩の結晶

⑧ 宇宙
・30億分の１の太陽

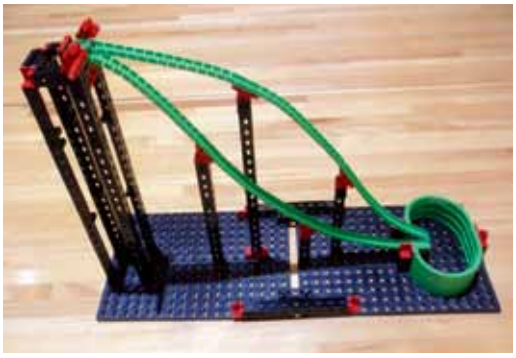
⑨ 理科室の実験道具
・駒込ピペット　アルコールランプ

展示室入り口



空中で回るコマ

自転車で発電



どちらの斜面が速い？

展示報告

平成26年２月１日(土)～４月６日(日)

企画展 秋田のくすり今昔物語

県内の医療関係団体、展示協力者のもと、「薬」をキーワードにして幅広い薬の物語を紹介しました。

＜主な展示構成＞

1．くすりの広がり……武士の服薬事例、秋田藩の薬園、角館の武家とくすり、村とくすり、マタギとくすり、カッパのくすり、置き薬、唐松神社のくすり、古代のいのり、まじないでなおす

2．町のくすりやさん……舛屋薬局(秋田市)、龍角散と藤井薬局(大仙市)、村田薬局(横手市増田)

3．自然のめぐみ……県内の薬用植物の乾燥見本　約40点

(体験)くすりの広場……薬研を使おう、行商の荷物、秤ではかる、年中行事の薬(屠蘇)、体とくすり、七味唐辛子、染色と薬草

マタギとくすり

江戸時代より秋田藩の許可を得て各地で狩猟した阿仁マタギは、熊の胆(い)を藩に納めるだけでなく、各家庭で薬を作り行商も行っていました。展示では、重要有形民俗文化財として指定を受けた道具等を紹介しました。薬としての熊の胆は有名ですが、それ以外の部位も薬として利用した記録があります。本展示に合わせ、北秋田市阿仁地区の方の協力のもとに、熊の各部位やマムシを加工し展示しました。

旧村田薬局

蔵の町として知られる横手市増田町には、明治から昭和にかけて建造された主屋や内蔵が現在も残っています。村田薬局は、かつて経済活動の要衝として栄えた増田町の老舗薬局です。展示では、村田薬局の一部をイメージしました。レトロな雰囲気を展示室内でも感じていただきました。

自然のめぐみ

展示までの１年間に集めた薬用植物を、それぞれ１～２ヶ月の間、高温で乾燥させました。昔は馴染みのあったセンブリ、ゲンノショウコなどの草本の他、樹皮や根皮なども展示しました。山野の植物が芽吹く春を、待ち遠しくさせるコーナーです。

秋田県の医療史に関する研究は決して多くなく、未だ知られていないことがたくさんあります。現代医療の恩恵を受けている私たちですが、秋田の人々の経験に基づいた知恵もとどめておきたいものです。展示室では、出会ったお客様同士が話を弾ませ、昔を懐かしむ場面が随所でみられました。また、多くのお客様から早速、体験談や貴重な情報を頂きました。今後も、秋田の医療を掘り起こす物語を多くの方と紡いでいきたいと思います。

(民俗部門：浅利絵里子)

展示報告

平成25年10月12日(土)～12月１日(日)

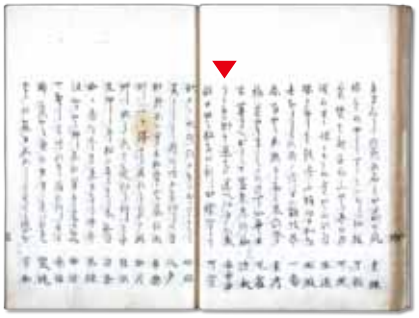
企画コーナー展（菅江真澄資料センター）

真澄と俳諧

展示の準備は、まず菅江真澄全集からの句の拾い出しから始めました。全部で50を越える真澄による句を拾い出すことができましたが、真澄が一人で詠んだ句（五七五）は７句だけで、他は土地の俳人たちとの付合でした。形式的には連歌と同じなのですが、使われている言葉や相手が句の担い手であることから連句と判断しました。連句と言っても歌仙（三十六句）などではなく、ほとんどは相手の詠んだ上句に真澄が下句を付けるもので、展示ではこれを「短連句」として紹介しました。

このように見てくると、真澄は句を自ら詠んだというより、人々との交流の中で歌を詠み、句も詠み、言葉を自在に操りながら文人としての旅を続けていたことがわかります。

特に展示では紹介しませんでしたが、俳諧関係では、秋田の吉川五明、花巻の伊藤鶏路、深浦の竹越里圭など、地方の宗匠が真澄と交流のあった人物として知られています。



俳諧法華
（横手市立増田図書館蔵）

吉川五明の没後15年に当たっての追善句集として、文政２年（1819）３月に出版。五明の肖像を巻頭に掲げ、門人214名、国外俳人171名の句を集めている。この中に、「うかれ出て迷はば迷へ江戸の春　真寿身」とある。「真寿身」が菅江真澄だとされている。

展示報告

平成26年２月８日(土)～３月23日(日)

企画コーナー展（菅江真澄資料センター）

随筆《久保田の落ち穂》の世界

《久保田の落ち穂》（館蔵）は、久保田領（秋田藩）の事柄を中心にした、真澄の考証随筆です。全部で66の項目からなり、当時の秋田の様子を知るには、格好の素材を提供してくれています。現代語訳が出版されておらず、図絵もないことから、一般にはなじみのない著作です。

展示では、全66項目のうち15項目を要約した上で、関係資料からも内容を知ってもらえるよう紹介しました。

また、展示では、冊子の表紙・大きさ・丁数・目次・本文行数・印章についての書誌的側面も紹介しました。なかでも、表紙に使われている「茶色白格子模様」は、《久保田の落ち穂》のほかに、大館市立中央図書館蔵本を中心とした16冊に見ることができます。本文に書かれた内容や表紙裏打紙に書かれた内容などから、執筆時期は別にして、装本は文政７年(1824)前後であろうと考えることができます。目次項目の上部に付けられた〇印がいくつか余っていること、白紙である遊紙４丁が後ろに綴られていることから、冊子として綴じ合わせてから数項目書き足すつもりであったことが推測されます。

（菅江真澄資料センター：松山　修）

左：《久保田の落ち穂》序文の印章
右：糸印（館蔵）の印章

《久保田の落ち穂》序文に捺された印章は、2.9㎝×2.6㎝の複郭朱長方印で、真澄所用印（全集では真澄蔵書印）と呼ばれています。重要文化財「菅江真澄遊覧記」(89冊）をはじめとする真澄自筆本の多くに捺されていることから、真澄の自筆を示す一つの指標となっています。印文は確定していませんが、室町時代から使われていたという「糸印」に分類する見方があります。右は、館蔵糸印の印章です。単郭ですが、印文は酷似しています。

クマムシを観察しよう

テレビやインターネット上でクマムシという動物が最強生物として話題になっています。その理由は、身体が乾燥して樽状態になると極端な低温や高温、長期間の乾燥、真空状態や強い放射線という極限環境に耐えることができるからです。この生物が身近な場所に生えているコケの中にすんでいることを皆さんは知っていましたか。クマムシのいる場所と採取方法がわかれば簡単に観察することができます。

クマムシの観察方法

1　コケを採取する

写真１

道路脇の歩道や地面のコンクリートのすき間など、天気の良い日が続くとカラカラに乾く場所に生えているコケ（写真１）を採取します。

2　コケからクマムシを採取する

水を１㎝ほど入れたシャーレにコケをひっくり返して表面を下にして入れます。コケが乾燥しているときは１時間ほどしてから、コケが湿っているときは20分ほど置いてからピンセットでコケをつまみ、水の中で軽くゆすります。こうしてコケの表面にすんでいる生物をシャーレの水の中に落とします。

3　顕微鏡で観察する

コケを取り出してから、シャーレの水を顕微鏡で観察します。シャクトリムシのように動くヒルガタワムシや、透明なミミズのようなセンチュウがいますが、それらとは違う、もそもそとした変な動きをしているずんぐりとした生き物がいます。それがクマムシです。

4　写真撮影

ここに紹介している写真はいずれも顕微鏡の接眼レンズにデジタルカメラを三脚で接近させて撮影したものです。この方法で、観察したクマムシを簡単に写真として記録することができます。また、同様の方法で動画も撮影することができます。

写真２

クマムシはミミズなどの環形（かんけい）動物とバッタなどの節足（せっそく）動物の中間に位置する独立した「緩歩（かんぽ）動物」として分類される生物です。大きさは0.1㎜～0.8㎜位、ずんぐりとした身体に肢が４対生えています。身体は薄いクチクラの殻に覆われていて、透明なものから暗緑色や赤橙色をしたものまで、種類によって様々な色をしています。水中やコケの中などの湿った環境にすみ、真（しん）クマムシ綱（こう）の仲間（写真２）と異クマムシ綱の仲間（写真３）の２つのグループに分けられ、全部で千種類以上見つかっています。真クマムシ綱の仲間は透明なクマのような姿をしていて、首を振りながら前に進んでいたかと思うと急に向きを変えて横に進むなど、活発に動き回ります。異クマムシ綱の仲間は長いヒゲが生え、４対の太い肢の生えたテントウムシのような姿をしています。大きさは真クマムシ綱の半分ほどで、動きも真クマムシ綱に比べると遅く、見ている方がイライラするくらいです。

写真３

今回は比較的見つかる可能性の高いコケを紹介しましたが、様々な場所にその環境に適応したクマムシがすんでいます。秋田県立博物館玄関前のコケ（写真１）を調べてみたところ、４種類のクマムシを見つけることができました。未知のことが多く、たくさんの魅力を持つ小さな最強生物をぜひ探してみてください。

（生物部門：佐藤久男）

カッパの薬の流通範囲

家伝薬の中にはカッパから授かったという伝承をもつ薬があります。秋田県内各地でも散見され、『奇々怪々あきた伝承』（福島彬人著　1999年　無明舎出版）ではカッパの薬の伝承を持つ薬として、北秋田市金田家の「根田薬」、横手市須田家の「正骨薬」、大仙市鷹觜（たかのはし）家の「龍気散」（龍起散）、仙北市小勝田甚助家の「金瘡妙薬」、秋田市太平嵯峨家の「家伝薬」などが紹介されています。

江戸時代の紀行家・菅江真澄は、カッパの薬と伝えられているものには「紅板皈（帰）」という薬草が多く用いられており、この薬草の別名を「カッパの尻ぬぐい」、「カッパ草」、「カッパ草伝」というために、カッパ相伝の薬と言われるのであろうと推測しています（『雪の出羽路平鹿郡十二』）。

大仙市太田町川口の鷹觜家に伝わるカッパの薬について、菅江真澄は、太田町川口、今泉地域で販売されていると記しています。鷹觜家はもともと現在の岩手県の出身で、カッパと思われる異様な風体の者から、接骨の技法と、「骨を接ぎ死肉を生かす妙薬」の作り方を習いました。その後、江戸時代中期頃に秋田へ移り住み、現在も子孫の方は接骨師をされています。

鷹觜家は、いくつもの薬を製造販売していましたが、その中でも「龍起散」「消炎散」がカッパ相伝の薬として伝えられています。龍起散は昭和35年（1960）の薬事法改正により製造中止になりましたが、消炎散は20年ほど前まで販売されていました。

昭和17年（1942）から19年までの龍起散と消炎散の販売記録が鷹觜家に残されています。具体的な販売方法は不明ですが、おそらく郵送でのやりとりか、行商によるものと思われます。この記録が鷹觜家で行われていた取引の一部なのかすべてなのかは判然としませんが、当時の様子を知る一資料としてここに紹介します。

記録では、日付ごとに、薬の販売数と合計金額、顧客の住所氏名が書かれています。各地域の薬の販売数をまとめたものが下図です。

件数が顧客数、赤字と青字で記した数が、消炎散、龍起散の販売数です。圧倒的に消炎散の売り上げが多く、全国各地に顧客がいたことが分かります。なかでも北海道で多く売り上げがあり、サハリン（樺太）や旧満州、朝鮮にまで販売されていました。

これらの薬は、一度だけ購入する人もいますが、２ヶ月ごとか、半年に１度ぐらい、10～20個まとめて購入する人も多くいました。特に北海道や関東地方では一度に数十個単位で購入する人が多く、個人で使用していた他に、販売もしていた可能性も考えられます。また、顧客住所には鉱山や鉄工所などが散見されます。

この時代は現在のように人びとが自由に医者にかかることが少なかったと思われます。そんな中、カッパの伝えた薬は、県内だけでなく、広く人びとを救う妙薬として流通していたことが分かります。

（民俗部門：丸谷仁美）

博物館歳時記

秋田県立博物館公式ホームページでは、「歳時記」として、博物館や小泉潟公園の出来事やようすを随時紹介しています。詳しい内容とコメントはホームページを御覧ください。本頁の日付は実施日、（　）内の日付は掲載日を表しています。

展　示

秋田の先覚記念室
「飛行詩人･佐藤章展」（10月19日）

ふるさとまつり広場
「東北のこけし」（1月12日）

菅江真澄資料センター
「真澄と俳諧」（11月30日）

企画展「わくわく科学展」
（1月12日）

セカンドスクール的利用

10月24日
職場体験でのパソコン入力
（天王南中2年生）

10月18日　自然展示室での学習
（土崎中1年生）

10月18日　自然展示室での学習
（下北手小1年生）

カメラスケッチ（博物館周辺）

ケヤキの落ち葉
（10月31日）

ケヤキハフクロフシ（9月20日）

はさがけ（9月29日）

わくわくたんけん室

わくわくイベント「ミッションをクリアして、お宝をゲットせよ!」（11月30日）

9月29日　博物館ボランティアによる「わくわくおはなし会」

わくわくたんけん室での
石膏レプリカづくり（9月29日）

石膏レプリカの製作準備
（1月23日）

1月17日　YR-1500運転台の
わくわくたんけん室への移動

表紙写真説明

正月前のわくわくたんけん室では、季節アイテムの「ミニかどまつ・ミニしめかざりづくり」を行いました（12月13日～27日）。ここ数年の恒例となっているためか、部屋に入ると真っ先に作り始める親子連れを何組も見かけました。このアイテムはどちらも小さい物です。撮影にあたって、定規を置いても素っ気ないし、ということで、何か縁起がいい気がして、五円玉をちょいと磨いて置いてみました。大きさがおわかりいただけるでしょうか。本紙を御覧のみなさまにも新年度、家内安全、千客万来、交通安全、学業成就、……笑門来福でありますように。さて、写っているのは、学芸職員が作った見本です。もう職人芸でしょう。科学に弱い私には、ミョウバンの再結晶（「わくわく科学展」展示）も職人芸に思えました。石膏を流し込む型（カタ）も学芸職員の自作なんですよ。下の写真は、干支のウマ２種です。（編集子）

平成26年度　展示予定

特別展

菅江真澄、旅のまなざし

9月20日（土）～11月9日（日）

企画展

魅了する色と意匠 ―あきたの染めと織り

同時開催　博物館教室「楽しいしぼり染め」作品展

4月26日（土）～　6月15日（日）

企画展

レピドプテラ ～チョウとガの自然史～

7月5日（土）～　8月24日（日）

企画展

地域展「男鹿・南秋の自然と文化」

11月29日（土）～　4月5日（日）

菅江真澄資料センター

企画コーナー展

●真澄、学びの技法	6月28日（土）～　8月17日（日）
●真澄、書に託した想い	10月18日（土）～12月　7日（日）
●真澄、津軽の旅	3月21日（土）～　5月10日（日）

秋田の先覚記念室

企画コーナー展　●ゲシェーになった男・多田等観　～日本人が見たチベット～

9月27日（土）～11月30日（日）

ふるさとまつり広場

●鹿島流し	4月　8日（火）～　6月29日（日）
●七夕絵どうろう	7月　1日（火）～　8月31日（日）
●特別展関連パネル展	9月20日（土）～11月　9日（日）
●秋田の凧	11月11日（火）～　2月　1日（日）
●ひな人形・押し絵	2月　3日（火）～　4月　5日（日）

秋田県立博物館ニュース　No.158　2014.3.18 発行
編集・発行　秋田県立博物館

〒010-0124　秋田県秋田市金足鳥崎字後山52
TEL：018-873-4121 ／ FAX：018-873-4123
ホームページは“秋田県立博物館”で検索！